

Title	トゥーキューデイデース, 「歴史」(青木巖譯, 生活社刊)
Sub Title	
Author	近山, 金次(Chikayama, Kinji)
Publisher	三田史学会
Publication year	1943
Jtitle	史学 Vol.21, No.2 (1943. 2) ,p.133(275)- 133(275)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19430200-0133

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

が中世都市の研究につけ加へぬと思はれる。ヨーロッパに比べて自治都市が單に未發達であつたと云はれるだけでなく、その未發達の歴史的な理由が探究される必要があるだらう。そしてヨーロッパ中世都市の具體的研究が高村象平、増田四郎、の諸氏によつて著しく進められてゐ、且我が中世史研究の進展又著しい今日それは必ずしもはや不可能ではないと思はれる。そしてその探究こそ思ふに中世都市研究の最も基本的な課題になるのではなからうか。著者が何時か問題を一層根底的に追求してわれわれに啓發を與へられんことを切望して止まぬ。妄評多謝。(渡邊基)

トウキーユ
「歴史」(青木嚴譯)
「生活社刊」

ヘーロドトスが「歴史の父」と呼ばれると同じ意味でトウキーユ・ディデースもまた「歴史の父」である。兩者が取り扱つてゐる題材の時代と性質とに一桁の相異がある様に、この二人の歴史家の本質にも業績にも當然の相異がある。前者は世界史を轉換さす様な大事件を前にして壯年期の潑刺たるギリシア精神をそのままに華麗な筆力を縦横に振つて古今東西の世界を論破してゐるのであるが、後者はギリシアの「大」を既に知りつくしたギリシアの天才が必然的に起つて来るギリシア世界の崩壊を前にしてその事件の成り立ちを觀じ、その事件を生み出す原因を解き、その事件を飽くまでも追及してそのうちにひそむ事件の意義を捕へんがために深い洞察を試みてゐるのである。前者が雄大な華やかな歴史であるのに比して、後者は深い人知のひらめきを集積した哲

學的著作である。兩者ともにその取り扱ふ題材に對する態度に於てそれぞれその題材の最も要求する表現を與へてゐることが、即ちギリシア史上に於て殆んど時を同じうしてこの二人の「歴史の父」を生み出すことになつた根本的な事情であらうと推察される。先にヘーロドトスの歴史を譯出して學界の好評を博された青木嚴氏が今日またトウキーユ・ディデースの歴史(上卷)を譯述されたことは(下卷も既に譯了の由、上梓の日も遠からぬことと拜察される)何よりも先づ本邦古典學界のために欣快至極のことと存ぜられるのである。

ギリシアを論ずる書は多い。しかしそれ等の書物のうちどれだけが吾人に本當のギリシアを教へてくれるであらうか。少くともこの兩譯は吾人に生々としたギリシア精神の諸相を直接に物語つてくれる。とりわけトウキーユ・ディデースの描いた世界はギリシア文化の酣な時代であつて其處に展開する事實はみな悲劇的な意義に富み、その事實に内在する壯大と哀感とが深い彼の洞察を透して劇的に描かれてゐるだけに我々の如き歴史學徒にとつては特に學ぶべきものが多いのではないかと推察される。

なほ青木氏は卷末にペリー教授の名著「古代ギリシア史家」に據つてトウキーユ・ディデースの生涯と業績とについて簡単に親切な一文を草せられてゐる。(近山金次、昭十七、十二、二日記)

東西文化の融合
(内藤智秀著)
(六盟館刊)

著者が序文に書かれてゐる様に、久しきに亘つて西亞東歐の文